



CONTENTS

- 1-トピックス ISO→TQM研究会(日科技連)の設立
- 2-私の提言 DX時代に品質管理を学ぶ意味
- 2-ルポルターージュ JSQC規格「テクニカルレポート 品質不正防止」講習会ルポ
- 3-ルポルターージュ 第134回クオリティークルポ/第436回事業所見学会ルポ
- 4-総会告知/行事案内/会費請求/教員公募/6月の入会者紹介

発行 一般社団法人 日本品質管理学会
 東京都杉並区高円寺南1-2-1 日本科学技術連盟東高円寺ビル内
 電話.03 (5378) 1506 FAX.03 (5378) 1507
 ホームページ:www.jsqc.org/

ISO→TQM研究会(日科技連)の設立

研究会主査/東海大学 金子 雅明

日科技連に設置した本研究会の目的は、(1)新TQMの概念、手法を確立すること、(2)将来のデミング賞審査委員となれるような育成・交流の場を作ることの2点にあります。

(1)については、品質管理・TQMに関する若手・中堅の大学研究者が不足していることや大学業務が忙しくなかなか研究者間の交流ができないことから、なんとか大学研究者どうしが定期的に研究交流できる場を作りたいという思いが元々ありました。また、TQMそのものに目を向けますと、1997年のTQM宣言がなされてから25年経過しており、その間にDXやSDGs、働き方改革、機械学習・AIなど、社会的に大きな変化が生じていますが、これら変化に対応した新たなTQMモデルを構築し、提唱することが強く求められています。そのためにも、現在の若手・中堅研究者の各専門分野の知識や研究成果を集積しなければならないと考えています。また、品質管理やTQMは“実学”ですから、TQM推進の実務に造詣が深い企業の方々のニーズや期待、問題認識をお聞きすること、また産学による共同研究フィールドの提供という意味でも、企業の方々の参画と協力は非常に重要です。

(2)については、皆様をご存じの通り、デミング賞は日本が世界に誇るTQMの世界最高ランクの賞ですが、この賞を審査する委員の担い手不足がかなり前から指摘されています。

私もその一員ですが、委員の減少傾向はさらに顕著になってきているため、近年は審査実務にまで影響が出てきているように思います。これまでは審査員候補をほぼ“一本釣り”のような形で探してきていましたが、それでは限界があり、やはりきちんとした育成の場を中長期的な視点で整備していかないといけないと考えました。これと関連して、日本品質奨励賞のリバイスも視野に入れています。近年、デミング賞を受賞する日本企業がなかなか出てこないのですが、それを増やすためにも、ISO 9001認証取得した企業・組織を如何にTQMにうまく導くことができるかが重要で、その観点から日本品質奨励賞の在り方を抜本的に見直ししたほうが良いと思っています。

あるきっかけで、日科技連の小野寺専務理事、島田理事が上記の危機意識を同様に持っていることが確認できたことから、大変ありがたいことに本研究会の運営事務局を担ってもらえることになりました。現時点(2023年8月)での本研究参加メンバーは18名で、日科技連事務局3名を加えた全21名となっています。メンバー18名のうち、大学研究者は13名、産の方々は5名です。特に、大学研究者は“若手・中堅”と標榜していますから、私自身が40歳中盤であることから±5歳程度を目安として、30後半から40後半ぐらいの方々を中心に参加してもらいました。このように研究・校務や実務でご多忙の方々に多

く参加いただけたのは、将来の品質管理、TQM界のためという共通の思いが皆様にあるからだ、改めて心動かされました。



第1回研究会開催時の様子

本研究会の第1回を8月7日15:00～17:00に日科技連本部ビル(西新宿)の会議室で開催し、現地参加者が8名、オンライン参加者は3名の参加でした(なるべく早く第1回目の会合を開きたいということで、開催候補日が少なく、参加できなかった方が多数出てしまい、申し訳なく思います)。当日は研究会の設立趣旨を説明し、メンバー間の自己紹介の後、本研究会で研究する対象について議論しました。まだ議論を始めたばかりですが、総じていえば、(1)、(2)についての基本的な課題認識は参加メンバー全員でほぼ共通していたと思います。今後は、1.5か月ぐらいに1回の頻度で開催し、研究対象を具体化していきます。議論した結果はまた別の機会に報告できればと思います。なお、研究会後には必ず懇談会・情報交換会をやることにしていて、個人的にはこれが一番重要だと思っています。少しアルコールを入れて雑談していくと、いろんなアイデアや深い議論ができてとても有意義な時間になります。今回もそうでした。こんな雰囲気の研究会ですが、今後の本研究会の活動にご期待ください。

● 私の提言 ●

DX時代に品質管理を学ぶ意味

東京理科大学 石垣 綾



現在、私が専門としているのは経営工学（生産システム工学）であります。経営工学においては、2000年当初まではQC、IE (Industrial Engineering)、OR (Operations Research) の3つが基礎技術となっており、それぞれの技術を発展させつつ、新たな技術を開発することが我々研究者の使命だと考えておりました。しかし、この数十年で情報技術が大きく発展し、一つの学問領域では解決できない問題に対し、その枠を越えた科学と技術の新しい領域が生まれ、新たな価値が創造される時代になりました。それと

ともに、QC、IE、ORという言葉が、AI (Artificial Intelligence)、DX (Digital Transformation)、データサイエンスなどといった言葉に置き換えられ、基礎技術であったものが概念に変化していったように思われます。だからこそ、今見直されるべきものは基礎技術であり、改めてQC、IE、ORが見直され、その必要性が強く示されるべきであると考えます。

品質管理は管理技術の一つであり、製品やサービスを作り出すための仕組みや活動を決定するものになります。例えば、需要予測を行う際、機械学習など最新の情報技術を使用することで精度の高い予測が可能になるかもしれません。しかし、現実の社会は複雑であり、多くの不確実性を持っているこ

とから、100%予測を当てることは困難です。そのような環境において需要予測をもとに意思決定を行う場合、単に予測値を提示するのではなく、その値をもって意思決定を行うことによる妥当性が示され、例外外れたとしても意思決定者にとっての納得感が得られることが、意思決定のためには不可欠であると考えます。これは品質管理での仕組みや活動の決定プロセスそのものであり、QC、IE、ORが基礎技術となり発展していた時代の経営工学では当然のように行われておりました。しかし、多くのデータが氾濫し解析される時代になったことで、科学や技術の発展と現場に乖離が生まれているように感じるようになっております。

だからこそ、自身がより一層品質管理を学び、深く関わっていくことには大きな意味があるのであり、品質管理の基礎理念はそのままに、新たな価値を創造できればと考えております。

JSQC規格
講習会
レポートテクニカルレポート
品質不正防止

2023年5月9日(火)午後、JSQC規格「テクニカルレポート 品質不正防止」講習会がオンラインで開催された。JSQC規格講習会としては最多となる171名の参加登録があり、社会的課題としての関心の高さを伺わせるものであった。

永田会長の開会挨拶では、「品質管理活動の再活性化の一つのトリガーとして品質不正の問題に取り組み、よりレベルの高い品質立国をめざすことができれば」との言及があった。規格に関する説明として、冒頭で中條氏より「制定のねらい」、続いて平林氏による「組織で何が起きているのか」、永原氏、篠氏による「品質不正はなぜ起きるのか」、安藤氏、古谷氏による「品質不正をなくすために組織はどうしたらよいのか」、伊藤氏による「品質不正をなくすために社会はどうしたらよいのか」に関する説明があった。最後に全体討論として、参加者からの質問に講演者各氏が

回答を行った。

本テクニカルレポートは、品質不正が起きている組織について、①実態、②発生要因、③対策が順序立てて説明されている。①実態は、多業界の45事例を選択したうえで、製造業18組織についての第三者委員会調査報告書の内容整理と、特に社会的影響の大きかった6組織の分析に基づく。②発生要因は、6組織のプロセスや組織文化を含む特徴、人の不適切な行動の面から解説される。③対策は、組織としてはTQMの適用が、社会としては啓発や教育等の視点で説明される。

7名の講師による講習はどれも濃密だった。その中で品質管理屋として重視したい点を挙げるとすれば、品質不正をTQM組織運営の不備として捉え、対策にTQMの適用を掲げている点である。すなわち、品質不正の発生過程は、善から悪へと切り換わるような明確な事態ではなく、日常業務の中の些細な行動から時間をかけて派生するものといえる。地道な取組は、報道等で耳目を集める状況とは乖離するが、品質不正の事象から日常管理までもが整理されたテクニカルレポートを参考にしたい。

下野 僚子 (早稲田大学)

第134回 クオリティーク ルポ

食の安全：HACCPの 本質を理解して ISO22000を 使いこなす

6月23日の午後、「食の安全：HACCPの本質を理解してISO22000を使いこなす」と題するクオリティークが開催され、東海大学海洋学部水産学科客員教授である荒木恵美子先生にご講演をいただきました。

食の安全に携わる者として「HACCP (Hazard Analysis and Critical Control Point)」や「コーデックス規格」、「ISO22000」などにはこれまでも馴染みがあり、個別に内容を把握していましたが、相互の関係について積極的に考える機会はありませんでした。今回のクオリティークをこの相互関係を学べる良い機会と捉えて参加することにしました。私なりにまとめたポイントを以下に記します。

- ・HACCPは、危害要因を把握し、それに基づいて危害要因の除去や低減のために特に重要な工程（重要管理点）を抽出するための手法であること。重要なハザードの管理に焦点が当てられているものの、

HACCPのみでは食の安全システムとして機能しないこと。

- ・コーデックス規格は、食品ハザードをコントロールするための規格であり、WTOのSPS協定における食品分野で唯一の国際規格であること。数多くのISO規格が多く引用され、また、日本の食品衛生に基づく法令規制の拠所となっていること。

- ・FSMSの原則には食品安全文化の醸成が包含されていること。醸成は人々の行動に基づく必要があり、今後の課題のひとつとして位置付けされていること。

- ・トップ診断のひとつに位置付けられるGemba Walksは、ヒアリングすることで経営層自らが各部門の業務・活動の実施状況を直接把握し、改善を促す活動のひとつであり、改善にはコーチングが大切であること。

食の安全を確保するためには、各規格の特徴を正しく理解し、適切に組み合わせることによって安全管理システムを構築し、確実に運用することが大切であると理解しました。

佐藤 健（東京都立産業技術研究センター）

第436回 事業所見学会 ルポ

DHL ジャパン(株) 中部国際空港 ゲートウェイ

令和5年6月27日(火)に、中部国際空港の貨物地区第2国際貨物上屋にて、テーマ：「DHLが考える品質とは（Service、People、Environmentなど）」で開催し、14名が参加した。

DHL Expressの本部はドイツにあり、Leipzig、Cincinnati、香港を中核とするHub & Spoke型の空輸物流によって世界220以上の国と地域を、Door to Doorの形で迅速かつ効率的に結ぶ「DHL」ブランドを礎に、国際エクスプレス・サービス及びロジスティクス・ソリューションを提供している。DHLジャパン(株)は1979年に設立され、従業員は約1900名（2023年6月）で、中部国際空港は3つある国内ゲートウェイの1つとして、物流業界で唯一の、中部を起点とする空輸ネットワークである。

DHLグループは"Excellence. Simply delivered."を使命に、"Connecting People, Improving lives."を目

指し、社員は"We are the logistics company for the world."の旗印の下、実現する独自能力として"Respect & Results"を推進している。また"Employer of choice - Motivated and skilled employees deliver exceptional quality."に代表される、社員を重視する経営品質や人的資本経営に資する、物流サービスの質の確保に特徴がある。見学した中部国際空港ゲートウェイは、地上・空輸の両面から同日搭載・同日配達範囲の拡充と集荷から採寸、X線検査、通関手続、自動仕分、実時間監視等により確実かつ迅速な配送システムを構築している。特に国内で唯一の総合保税地域の認可を受け、施設間の保税や税関の手続等の大幅な簡素化による時間削減を図っている。また、大型重量物の手作業を軽減させるボール型回転金具を床に設置する工夫や通路の壁看板にあった言葉"There's nothing basic about the basics."が印象に残った。

見学会開催にご協力戴いたDHLジャパン中部国際空港ゲートウェイの関係各位に感謝申し上げます。

栗本 英和（名古屋大学）

第53回通常総会

日本品質管理学会第53回通常総会を右記のとおり開催いたします。

日 時：2023年11月11日(土) 10:00~11:00

場 所：名古屋工業大学

行事案内

●第135回クオリティトーク（東日本）

テーマ：MTシステムの探究

ゲスト：永田 靖 氏（JSQC会長/早稲田大学）

日 時：2023年9月19日(火)18:00~20:30

会 場：オンライン（Zoomミーティング）

詳細・申込：https://jsqc.org/135qtalk/

●JSQC規格「プロセス保証の指針」講習会

日 時：2023年10月5日(木)13:30~17:30

会 場：オンライン（Zoomミーティング）

講 師：福丸 典芳 氏（福丸マネジメントテクノ）

プログラム：

1. JSQC規格「プロセス保証の指針」制定のねらい
2. プロセス保証の役割と構成要素
3. プロセス保証の基本・進め方・ツール(1)
4. プロセス保証の基本・進め方・ツール(2)
5. 全体討論（質疑応答）

詳細・申込：https://jsqc.org/std21-001_2023/

●第53回年次大会（本部）発表募集

日 時：2023年11月11日(土)

会 場：名古屋工業大学

(1)申込期限

発表申込締切：9月22日(金)

予稿原稿締切：10月19日(木)必着

参加申込締切：11月 1日(水)

(2)研究発表・事例発表の申込方法

https://jsqc.org/53annual_cfp/

●第138回クオリティトーク（東日本）

テーマ：モノからコトへの品質保証体系図

ゲスト：細見 純子 氏（中部品質管理協会/
2030年の質価値創造研究会）

日 時：2023年11月29日(水)14:00~16:30

会 場：オンライン（Zoomミーティング）

詳細・申込：https://jsqc.org/138qtalk/

事務局

JSQCホームページ：www.jsqc.org/

本 部：E-mail：jimukyoku@jsqc.org

TEL：03-5378-1506

FAX：03-5378-1507

中部支部：E-mail：nagoya51@jsa.or.jp

TEL：050-1742-6188

FAX：050-3535-8675

※7月よりFAX番号が変更になりました

関西支部：E-mail：kansai@jsqc.org

TEL：06-6341-4627

FAX：06-6341-4615

教員公募

千葉工業大学 未来変革科学部 デジタル変革科学科

募集人員 助教または准教授1名

所 属 未来変革科学部 デジタル変革科学科（新設）

専門分野 データサイエンス応用分野（情報科学・統計学のビジネス、社会課題解決への応用など、文系の専門分野も含みます）

着任時期 2024年4月1日

応募締切 2023年9月29日(金)必着

詳 細 千葉工業大学 教職員募集

https://www.it-chiba.ac.jp/institute/adoption/

慶應義塾大学 理工学部 管理工学科/ 大学院理工学研究科（オープンシステムマネジメント分野）

募集人員 助教(有期)1名

所 属 慶應義塾大学 理工学部 管理工学科

慶應義塾大学大学院 理工学研究科 開放環境科学専攻

専門分野 経営工学、管理工学分野の理論と実践に興味があり、これに関する研究、教育を意欲的に進める人材を求める

着任時期 2024年4月1日

応募締切 2023年10月23日(月)必着

詳 細 慶應義塾大学 理工学部管理工学科/大学院理工学研究科/教員公募

https://www.st.keio.ac.jp/corporations/recruit/202308018_08.html

第53年度会費請求のお知らせ

第53年度（2023年10月1日～2024年9月30日）会費請求書を郵送いたします。

ゆうちょ銀行自動引き落としを利用されている方には請求書を送付いたしていません。

10月25日に引き落としいたしますので、ゆうちょ銀行口座の残高をご確認ください。

2023年6月の 入会者紹介

2023年6月22日の理事会審議において、下記の通り正会員16名、準会員6名、職域会員1名の入会が承認されました。

.....
(正会員16名) ○大西 宙（アネスト岩田）○稻田 明彦（新エフエイコム）○石原 千彰（デンソー）○長谷部 朝彦・黒川 貴則（ジェイテクト）○池田 幸平（クボタ）○早津 成夫（埼玉病院）○杉西 優一（日立製作所）○武濤 雄一郎（日本規格協会ソリューションズ）○塩濱 敬之（南山大学）○池田 素子（東レエンジニアリング）○水谷 剛志（ブラザー工業）○寄田 明宏（関西学院大学）○蒲生 慶一・近藤 実・垣田純之（日立Astemo阪神）

.....
(準会員6名) 森田 和磨（東京理科大学）○塚田 利空・大越 貫（慶應義塾大学）○松本 拓也・土井 健嗣・藤井 康平（中央大学）

.....
(職域会員1名) ○中野 功（ユニチカ）

名誉会員：25名

正 会 員：1668名

準 会 員：84名

職域会員：51名

賛助会員：156社230口

賛助職域会員：12名

公共会員：15口